

議案第 13 号

令和 3 年度板橋区登録文化財の決定について  
上記の議案を提出する。

令和 4 年 3 月 8 日

提出者 板橋区教育委員会教育長 中川 修一

令和 3 年度板橋区登録文化財の決定について  
東京都板橋区文化財保護条例（昭和 58 年板橋区条例第 16 号）第 4 条第 1 項の規定に基づき、下記のとおり新たに文化財を登録する。

記

- 1 板橋区文化財として新たに登録するもの 2 件
  - （1）有形文化財（歴史資料） 1 件  
日曜寺田安家奉納仏画
  - （2）有形民俗文化財（信仰） 1 件  
木下出世稲荷

（提案理由）

板橋区文化財保護審議会から、板橋区登録文化財の登録について答申があったため、これを承認し文化財を登録する必要がある。

令和4年2月18日

東京都板橋区教育委員会 様

板橋区文化財保護審議会

会長 松崎 憲三



板橋区文化財の登録について（答申）

令和3年8月25日付3板教生第347の2号で諮問のあった標記のことについて、板橋区文化財保護審議会で本日令和4年2月18日に審議した結果、下記のとおり意見が一致したので答申します。

記

- 1 板橋区文化財として新たに登録するもの 2件
  - (1) 有形文化財(歴史資料)  
日曜寺田安家奉納仏画
  - (2) 有形民俗文化財(信仰)  
木下出世稲荷

令和3年度板橋区文化財保護審議会 答申内容一覧

1 新たな文化財の登録・指定

番号	名称	所在地または居住地	所有者・管理者または保持者	種類	内 訳	来 歴 ・ 内 容 及 び 諮 問 理 由
1	日曜寺田安家奉納仏画（にちようじたやすけほうのうぶつが）	大和町42番1号	宗教法人日曜寺（にちようじ）	有形文化財（歴史資料）	4 幅	<p>「日曜寺田安家奉納仏画」は、徳川8代将軍吉宗の次男で、徳川御三卿の初代田安家当主・田安宗武（たやすむねたけ）とその親類縁者が奉納したと伝わる仏画を一括したもの。内訳は、愛染大曼荼羅（あいぜんだいまんだら）、金剛界曼荼羅（こんごうかいまいんだら）と胎藏界曼荼羅（たいざうかいまいんだら）の二幅一対からなる両界曼荼羅（りょうかいまいんだら）、そして「弘法大師影像（こうぼうだいしえいぞう）」の4幅である。</p> <p>日曜寺は、光明山日曜寺（こうみょうさんにちようじ）と称し、本尊は愛染明王（あいぜんみょうおう）、総本山は文京区湯島にある霊雲寺（れいいうんじ）である。18世紀初めに有慶比丘（ゆうけいびく）によって開かれたとされ、のちに田安宗武の保護を受けて田安家の祈願寺として繁栄した。</p> <p>19世紀成立の『新編武蔵風土記稿』（しんぺんむさしふどきこう）によると、田安宗武をはじめ正妻の寶蓮院（ほうれんいん）、息子の松平定信らも当寺に仏像、仏画等を奉納したことが記されている。なお、区登録有形文化財である「日曜寺扁額」も松平定信が自らの筆跡を額に仕立てて奉納したものである。</p> <p>当寺は、第二次世界大戦で被災した際に山門以外は境内のほとんどが焼失したとされ、寺内にあった仏像や仏画も失われたと伝わっている。ところが、今回、文化財調査を行ったところ田安家奉納の仏画等が発見された。そのうち、愛染大曼荼羅は絹本着色（けんぼんちやくしよく）、寸法は縦288.0×横194.5（cm）、両界曼荼羅は紙本着色（しほんちやくしよく）でどちらもおよそ縦横260.0×220.0（cm）の大きさである。仏画の特徴は、筆致が非常に精細であり、さらに両界曼荼羅の構図が日曜寺の総本山霊雲寺に特有の形式をとる点もあげられる。いずれも描表装（かきびょうそう）の部分に徳川家の葵御紋が金泥（きんでい）で描かれ、一部は菊紋の上に葵御紋が重ねて描かれる。加えて、同じく描表装に金泥で描かれた鳳凰が飛び交い、豪華な装丁が施されている。また、絵師については他の霊雲寺派寺院に所蔵されている両界曼荼羅と比較したところ、江戸幕府の仏画制作に携わった神田宗庭（かんだそうてい）が関与した可能性が考えられる。</p> <p>「弘法大師影像」については、第1回文化財保護審議会後の調査で所蔵が確認された。絹本着色、描表装で縦横142.5×50.3（cm）である。仏画は損傷が大きく、これは火災が原因と伝わる。史料の端裏書（はしうらがき）に、もとは田安宗武の屋敷にあったが、屋敷が火災に見舞われた際に灰中から取り上げたと記されており、『新編武蔵風土記稿』にも同様の記載がある。田安家や江戸幕府の文献資料にも当家で火災が発生したことが記され、この伝来を裏付けている。これらの奉納品は江戸時代中期の板橋区内における日曜寺の活動や、徳川御三卿の田安家との関わり、そして近世における仏教美術をを明らかにする資料としても貴重である。</p>

2	木下出世稲荷 (きのしたしゅっせいなり)	大和町37番 1号	宗教法人智清 寺 (ちせい じ)	有形民俗文 化財 (信 仰)	一括	<p>智清寺の境内にある社に祭られている稲荷で、木下稲荷 (きのしたいなり) または藤吉稲荷 (とうきちいなり) などとも呼ばれている。安永2年 (1773) 成稿の『江戸図説』 (えどずせつ) 以降、『四神地名録』 (ししんちめいろく) など、江戸時代に広く庶民に親しまれた複数の地誌に記されている。また、安政5年 (1858) の『五海道中細見記』 (ごかいどうちゅうさいけんき) には、板橋宿周辺の名所として「藤吉いなり」が描かれている。</p> <p>現在の稲荷社前に縁起を記した石碑があり、その記述によると、元和3年 (1617) に智清寺の当時の住職によって、境内に稲荷社が建てられたという。その神像は豊臣秀吉が木下藤吉郎と名乗っていた時分から信仰していたものとされ、一説には大坂城落城後、大坂籠城の浪人である高松半平という人物によって智清寺にもたらされたとされる。神像が秀吉ゆかりの稲荷でありその後、立身出世を遂げたことから、木下藤吉稲荷、また木下出世稲荷などと称されるようになったという。</p> <p>豊臣秀吉ゆかりの寺社は日本全国に多数あるが、木下藤吉郎の名を冠したものは極めて稀であり、またその仲介者として、高松半平なる人物が登場するものは他に類例がない。大坂の陣以降、江戸時代を通じて、豊臣秀吉を祭神とする寺社は公式には認められないが、一方で18世紀以降、出版物などによる太閤記物の流行や、京都・大坂など上方における秀吉ゆかりの寺社での開帳などによって、上方を中心に、秀吉を現世利益の神とする庶民信仰の高まりが知られている。同時期に江戸で流行した稲荷信仰に、上方の庶民信仰が結びついたかのような伝承が当地に残っているのは、中山道の一番目の宿であり、いわば江戸の入口である板橋宿の地域性によるものではないかと考えられる。</p> <p>木下出世稲荷大明神の社には、2軀のダニキ天像が安置されている。いずれも近世の作であるが、一木造で素朴な本尊に比べ、前立仏は本体に玉眼や彩色が施され、狐は金箔で仕上げられている。江戸時代から一般の参詣が行われていたことを裏付けるとともに、名所としての賑わいが推測される。当稲荷社は板橋宿を代表する祈りの場であり、江戸時代以来の庶民の信仰を伝える貴重な資料である。</p>
---	-------------------------	--------------	------------------------	----------------------	----	---